



大学コンソーシアム八王子

The Consortium of Universities in Hachioji

平成23年度大学コンソーシアム八王子 学生企画事業補助金成果報告書

平成24年2月8日

電気エネルギーを体感しよう！ ー太陽光で動く乗り物はこんなにすごい！！ー

団体名 サレジオ高専 機械電子工学科 学科プロジェクト
代表者名 藤原 章裕

1. 事業内容

電気エネルギーは、社会において必要不可欠であり、その重要性はますます増している。しかし、その重要性に気づいている子供は少ないと思われる。そこで、イベントにおいて幼児から小学生までの子供たちと中心にソーラーバイクを試乗していただく。マシンの形状はとてもユニークな3輪のバイクである。このユニークなところを生かし、将来を担う子どもたちに夢を与える。さらには、父母の方々にも少しでも電気への興味を持ってもらうことで電気エネルギーの理解を図ることを目的として実施する。

2. 実施報告

今回のイベントは、八王子市主催のイチョウ祭り（陵南公園）にて行った。本事業では、イベントに来場した子供から大人まで多くの人に楽しんでいただいた。また、ケーブルテレビ局八王子テレメディアに取材を受けるなど広報面でも本事業をアピールすることができたと考えられる。イベント1日目は、雨天のためイベント来場者数が皆無に近かったが、2日目は約100名を超える来場者がマシンを試乗し、大盛況となった。また、意識等を調査するために試乗していただいた方にアンケートを実施した。さらに、イベントの出展情報を事前に本校のHPに掲載し、多くの児童の来場を呼びかける宣伝を行った。

図1にマシンの試乗体験の様子を示す。製作したマシンは、3輪の電動トライクで客車を牽引するものである。客車の採用は、一度に多くの人に乗車してもらうための工夫である。図1より、牽引機能があるユニークなマシンなため、一度に多くの児童や中学生、大人などが試乗体験することができた。また、本マシンは蓄電池があるので日が暮れた夕方でも充電したエネルギーで走行することができる。し

たがって、製作したマシンは、日が暮れた夕方でも大勢の人を乗せて動かすことを実演できたので、電気のエネルギーの有効性を示すことができたと考えられる。

また、試乗中に子供や父母からマシンや電気エネルギーに関する質問を多く受け、説明を行なった。地道な活動を行うことによって、事業の目的である電気エネルギーの理解が図れたと考える。



(a) 幼児～小学生の試乗



(b) 中学生の試乗

図1 マシンの試乗体験

図2に試乗体験の宣伝の様子を示す。図2のように大きいモニタで宣伝を行い、小さなモニタ(iPad)で大会に出場したマシンの写真をスライドショーにて放映した。レース場で走行するマシンをその場で試乗できるワクワク感を提供できたと考える。

図3に試乗体験を実施した学生と八王子市長との集合写真を示す。図3の学生5名が試乗体験の宣伝・マシンのドライバを担当した。

図4に試乗体験後に実施したアンケート結果の一例を示す。図4(a)を見ると75%の人は従来から電気自動車等に興味があり、25%の人が興味をもっていなかったことがわかる。しかし、図4(b)を見ると試乗した後は95%の人が興味をもてたことがわかる。このように本事業の実施前後で20%の人が興味が向上することができた。

以上により、小学生や中学生・大人の方々までイベントに楽しんでいただき、電気エネルギーに対する興味が向上したと考えられる。

3. 事業を実施した感想

本事業は、2日間の実施であった。初日は、雨となり残念だったが、2日目は晴天に恵まれたので試乗体験を1日中実施できた。2日目だけでも100人を超える人に試乗体験をしていただくことができた。したがって、2日間とも晴天ならもっと試乗体験の人数が多かったと感じている。

今回は八王子市主催のイチョウ祭りであったが、今後も小学校や、児童館などから出展依頼、試乗体験の依頼があれば即時受け入れる予定である。

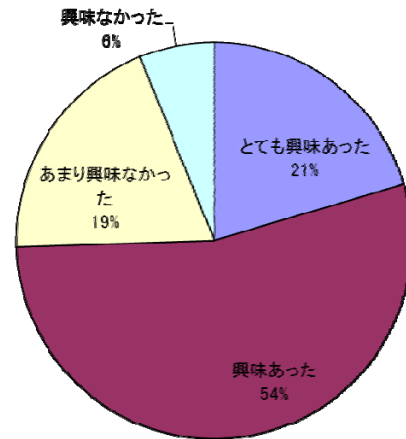


図2 マシンの試乗体験の宣伝の様子

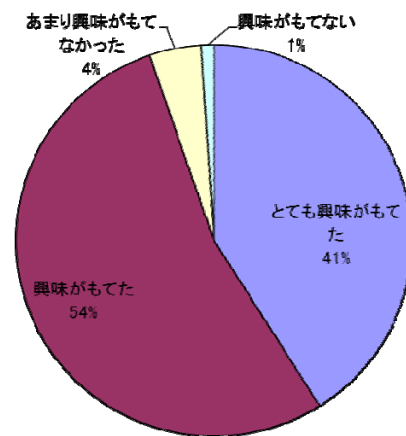


図3 集合写真

※ 左から専攻科1年、本科3年、黒須八王子市長、本科5年、本科3年、本科5年



(a) イベントに来る前からソーラーカーや電気自動車に興味がありましたか？



(b) 本イベントに参加してソーラーカーや電気自動車に興味ももてましたか？

図4 アンケート結果の一例

コンバート EV 研究会

団体名 首都大学東京 コンバート EV 研究会

代表者名 萩原浩貴

①事業内容

・コンバート EV とは何か

EV とは、Electric Vehicle の略で、電気自動車のことを意味する。近年 EV の開発および活躍は大変目覚ましいものであり、一般道路でもたびたび目にする機会が増えている。代表的なものでは日産自動車の LEAF、三菱自動車の i-MiEV などがある。

我々の活動は、これらのように 1 から電気自動車を開発するのではなく、既存のガソリンエンジン車から、様々な構成部品(エンジン、マフラー、ガソリンタンク等)を取り除き、新たに電気自動車にコンバート(変換)することを目的として活動している。

・コンバート(変換)を行う意義

環境問題が騒がれている昨今、自動車からの排気ガス、主に CO₂ や NO_x を抑える必要性が問われている。それだけではなく環境問題について、別の観点から考えると、車を走行させるだけではなく、一台の新たな車両を生産するにも、さらに多くの二酸化炭素を排出し、廃棄をする上でもコストがかかる。

コンバート EV に乗ることで、排気ガスを出さずに走行できるのはもちろん、車体はそのまま、駆動部分のシステムの変換のみで作ることができるので、1 から新たな車両を作るよりも大幅にコスト、また生産する上での CO₂ を削減できる。

さらに、クラシックカーや名車、マニア向けの車もコンバート EV によって電気自動車に変換することで、愛着がある車がガソリン車であるために乗り続けることに抵抗がある場合でも永く乗り続けることができるのである。

・今回の事業実施内容

コンバート EV は現時点では知名度も低い為、あまり一般的ではなく、趣味で行うケースが大半を占める。

今回はそのコンバート EV を広く認知してもらう為、

本学の大学祭みやこ祭に参加、展示を行う。

展示方法は、コンバート EV 車両を、本学 11 号館前に設置し、そのまわりをパネル紹介文で活動について解説を行う。また、子供にもわかりやすいように手作りの絵本も作成し、幅広い年齢層にも理解してもらえる配慮を行った。

②実施報告

車両のまわりにパネルを 4 台設置し、スタッフが紹介を行った。来場者は約 600 名が来場した。印象として来場者構成は子供と年配の方が多く、興味をもって、通りすがりに見るという形であった。来場者にはアンケートと紹介ビラを配布した。また回収したアンケートは 53 部であった。アンケートについては③事業を実施した感想にて述べる。

図 1 は大学祭展示の風景である。



図 1 大学祭風景

本来ならば図 2 に示すように、モーターが搭載されている状態になる。しかし、展示においては視覚的にわかりやすくするようにモーターを取り外し地

面に設置した。そしてデモンストレーションとしてそのモーターを空転させる実験を行い、実際の制御方法の紹介を具体的に行った。



図2 モーター搭載の様子

また、モーター制御に関してはアクセルペダルではなく、PCによる制御を行い、これも視覚的にわかりやすくする為の配慮を行った。図3は運転席周辺の様子である。



図3 運転席の様子

③事業を実施した感想

・アンケート結果から感じたこと

アンケートについてであるが、主な質問だけピックアップを行うと、「知名度」に関しては知っているが約18%、名前だけは約22%、知らないは約60%とやはり過半数の方は知らないを選択していただけて今回の活動を行う意義はあったが、別の質問項目

の「今後乗ってみたいか」という質問には、約65%の人が乗りたくないと回答した。

実際にコンバートEVにする上で、エンジンを取り外すため、ブレーキが効きにくくなる(別途ポンプを追加すれば解消される)ことや、古い車両のボディを使う為に衝突の安全基準を気にかける人が多く、また昨今の原発問題等で節電をしなければならない背景がある為、このような回答結果であったと考察する。

いままで、一般の方に見ていただく展示などの機会がなく、来場された方の感想から今後の活動においてかなり参考になる意見を得られたため、非常に今回の大学祭参加は今後のプロジェクトに対してのモチベーションが上がった。展示についての反省を生かすとすれば、今回の展示についてはたまたま通りすぎり、見ていくという方がほとんどであった。今後同様な展示を行うとすれば、「展示を見る為に行く、興味をそそる」企画作りをすることも念頭にいれる必要があると考える。

・今後の活動の展望

最終的な事業の目標は、モーターとトランスミッションをユニットとし、自動車の整備工場などで簡単に組み付けられ、気軽にEV化できることを目指す。目標への最初のステップとして、現在の車両を実際に公道などで走行できることを目指す。

しかし、走行まで現状では様々な問題を抱えている。モーターとミッションをつなぐ部品の剛性不足や支える部品でいかにモーメントを抑えるか、実際の車に走行感を近づけるのか、電気自動車特有の力強い加速感を出させるかなど決めなくてはならない。目標に近づけるため、現在は産業技術研究所の協力を得て、様々な中小企業を紹介してもらい、コンバートEVの部品の加工や製作の上で必要なものの調達を行う。

また車両の製作などのハード面と同時に、ソフト面、つまり広報などの活動を視野にいれる。昨年7月には日経新聞に紹介され、また今後は同研究所主催の展示会や八王子市EVフェスタ等の参加を行い、「コンバートEVをより深く知ってもらい、普及する”土壌づくり”」を目指す。

理科好きになろう！

団体名 拓殖大学 サイエンス・ボランティア愛好会

代表者名 横山権和

① 事業内容

小学生・中学生に、割り箸や紙コップなどの身近な材料を使い楽しんでもらうため「ものづくり出張講座」を開催する、場所はそれぞれの小・中学校を訪問して行う。「手作りブザー」「ミニロボのシャッ君」「手作りモーター」「紙コップスピーカー」などを用意する。各学年でレベルにあった各々説明をし、製作に望んでもらう。この「ものづくり出張講座」を通して普段とは違う雰囲気、理科を楽しんでもらう。

② 実施報告

八王子市立館小学校にて理科授業の一環としてももの作り講座を行いました。各学年にテーマがあり、それぞれのテーマにしたがって目的のものを作製し、実際に使用して動作を確認しました。八王子市立館中学校では「ものづくり出張講座」で中学2年生を対象に、プラスチックの箱を土台にし、ネジ、エナメル線、鉄の板を組み合わせて電池ボックスとつなぎ、電磁ブザーを製作しました。作る前になぜブザーが鳴るのかという仕組みと作業の説明をしました。横山第一小学校での「ものづくり出張講座」では小学生を対象に、紙コップ・クリップ・エナメル線・磁石を用いたクリップモーターと、ストローに穴をあけ息を吹き込み音を鳴らすストロー笛を製作しました。他大学のボランティアの方々もいて、文化祭のような形式で行われました。各班五人に一人のTAを配備し、時間を指定し三回に分けて進行しました。

③ 事業を実施した感想

この「ものづくり出張講座」を実施するにあたって子供達に少しでも理科に興味関心を持ってもらえたら良いなと思い実施しました。まず子供達の作製の手助けができたことに感謝します。思い通りに出来なくて途中で投げ出してしまう子、上手に出来て理科に関心を持つ子と様々でした。今後はうまく出来なくて理科に興味が無くなる子に対して最後まで諦めずに接していくことが大事だと思いました。

子供達は、最初から最後まで「すごい！」と言っていました。まさか紙コップから音が聞こえたり、クリアファイルのシートで作ったプロペラが浮上したりするとは思ってもいなかったようで、最初から最後まで興味を持って取り組んでくれました。きっと、私にはその新鮮さや興味関心が少なかったから、準備の大変さだけを感じてしまったのだと思います。

今回の活動を通して、どんな体験に対してもいつも初心に帰り、興味関心を持って取り組む姿勢というものを子供達に教えてもらいました。またこれかと思わずに、今度はどんな発見が出来るかなと思い、これからどんなことにも取り組んで行きたいと思います。



高尾山への外国人観光客誘致策を考える

団体名 中央大学

FLP 国際協力プログラム演習 A

鈴木洋一ゼミ

代表者名 大賀 菜美

(法学部政治学科 2 年)

※代表代行

田中 清生

(法学部政治学科 2 年)

②和歌山県高野山でのヒアリング・実態調査 (2011 年 8 月 15-17 日)

③八王子市高尾山でのヒアリング・実態調査 (2011 年 11 月 20 日など)

④比較・検討し、高尾山における改善案、誘致策を提言

以下、4つの報告を行う。

まず、鎌倉の調査では、鎌倉は東京観光と付随し、また短期間で複数の寺社を回るツアーを主体としており、日帰りの観光地として外国人に人気な高尾山との共通性があることが判明する一方、寺社や商店街などが十分に一体化・連携していない、外国人に対する寺社の説明や名物、食事についての情報が不足しているとの印象を受けた。

1、事業内容

日本政府が外国人観光客誘致に力を入れている昨今の状況から、大学所在地八王子の最も有名な観光地である高尾山をフィールドにして、外国人誘致策の検討を試みることにする。

比較を通じて検討を行うこととし、比較対象としては①寺社観光地で高尾山と同様、都心からのアクセスが便利である神奈川県鎌倉、②高尾山と同様に自然と寺社を観光政策の柱とする和歌山県高野山を選択した。それぞれの地が有する特性・特徴を考慮に入れ、高尾山でも導入可能性のある施策の検討を行うこととする。

また高尾山に実際に登ってみて外国人観光客誘致の観点から気づいたことや、外国人留学生と高尾山に登り、外国人の視点から気づいたことをヒアリングし、誘致策の検討に加えるものとする。

2、実施報告

事業内容をもとに、我々が行ったことは主に4つある。

①神奈川県鎌倉でのヒアリング・実態調査 (2011 年 7 月 1 日)



次に、高野山の調査では、外国人観光客だけでなく、高野町役場企画課の方、スイス人僧侶で観光庁から観光大使に任命されているクルト・巖蔵さん、外国人観光客の憩いの場になっているカフェを経営する柘植さんにもヒアリングを行った。高野町は金剛峯寺を頂点として発展した独特の歴史的経緯が町並みと観光政策の屋台骨になっており、外国人観光客も宗教・文化に造詣の深いリピー

ターが多いことが判明した。然るに、外国人
外国人観光客への情報提供面では改善でき
る点も見出された。

その一方、普遍的に応用できる側面も発見
した。例えば、公衆トイレが清潔に保たれて
いたり、古い町並み・伝統を保つために細か
い配慮がなされているなどである。



高尾山では、11月20日の外国人留学生と
のツアーをはじめとして、随時実態調査を行
ってきた。外国人留学生からの意見として、
外国語表記のルート案内の看板や注意書き
を立ててほしいなどが挙がり、我々の中でも
トイレや休憩スペースなどがもっと必要で
はないかという声が聞かれた。また、学園都
市八王子という魅力を活かして、学生をボラ
ンティアなどで高尾山観光に活用してはど
うかというアイデアも出てきた。



最後にこれらの調査をまとめ、比較・検討
し高尾山における改善案、誘致策を検討した。
設備面はトイレの増設や清潔なトイレを保

つことが必要、言語対応の面ではホームペー
ジやルート案内、注意書きなどを多言語化
すること、ボランティアの面ではインターン
や授業の一環などで学生ボランティアを活
用したり、公募で外国人ボランティアを活
用することなどが改善案として挙げられた。また、
政策提言は大きく2つの柱を立てた。①ソー
シャルキャピタルの向上による地域連携、②
外国人への配慮である。

①では地域連携の要に大学・学生を据え、
ボランティアや観光学の応用などで行政、
NPO/NGO、商店、各種産業組織、住民と関
わっていくことで地域力が向上し、顧客(＝
観光客)に適切なサービスが提供できるよう
になり、観光客が増加するという筋書きで、
大学・学生のさらなる活用を提言した。

②では外国語メニューや案内板の充実や
外国語を話せるスタッフを学生とリンクし
ながら確保したり、高尾山の更なる魅力を知
ってもらうために外国語の説明板、パンフレ
ットの拡充など外国人目線からの改善を提
言した。

3、事業を実施した感想

今回の事業を通じて、八王子の宝でもある
高尾山について深く考え、高尾山の魅力を再
発見することができた。また、他の観光地の
比較を通じて高尾山に対する改善案や政策
を提言したことで、高尾山が観光地としてこ
れからどのように歩いていくのか期待が高
まった。今後も高尾山の魅力を広めていき
たいし、外国人誘致に積極的に関わってい
きたいと思った。最後に当事業実施にお
いて、関わっていただいたすべての方々に
感謝申し上げます。

八王子在住の東日本大震災の被害を 受けた学生らによる震災支援活動と その成果の発表～八王子市へ向けて～

団体名 中央大学 FLP 国際協力プログラム
代表者名 はせがわさとみ ゆうさえりか きまきかか やこ
長谷川里実・遊佐恵理佳・崎坂香屋子

① 事業内容

- 1 宮城県気仙沼大島への復興支援ボランティア派遣を実施。
- 2 中央大学生による震災ボランティア写真展を実施

② 実施報告

1 宮城県気仙沼大島への復興支援ボランティアの派遣

大学の学園祭時期にあたる11月3日～6日の3日間の日程で気仙沼大島へのボランティア派遣事業を企画した。今後も震災ボランティアに携わっていく意思のあることを参加の要件としたのだが、すぐに定員の8人の枠は埋まった。

1日目と2日目は港の地区に残る瓦礫撤去作業の撤去作業を行った。港近くに数多く残る細かい瓦礫を、ガラス、木材、金属などに分別しながら取り除く作業を他の団体と協力しながら2日間行って、やっと家一軒分の面積の土地をきれいにする事ができた。

3日目には大島の主な産業の一つである養殖業の復興支援を行った。ホタテ・わかめの種を植えつけるロープに一つ当たり40kg以上ある重りを20個つけ、沖まで漁師の方とともに船で運び、指定の場所でロープを海底に落として固定するという作業を行った。

活動期間中はミーティングを重ね、これから自分達にできるボランティアについての意見交換を行った。このミーティングで中央大学内で写真展を開催するというアイデアが生まれ、以下の企画の実施へとつながった。

2 中央大学生による震災ボランティア写真展を実施

中央大学内図書館のホールにて、1月16日から21日の6日間、「中央大学生による震災ボランティア写真展」を開催。中央大学にボランティアセンターが置かれていない状況でも、多くの中央大学生がボランティア活動に積極的に取り組んでいることを学生や大学関係者に発信し、ボランティア活動に積極的な学生同士が互いにつながるきっかけを作ることを目的とした。開催期間はテスト期間であったにも関わらず足を運ぶ人も多く、会場に設置したコメントノートには来場者からの震災への様々な思いが綴られた。

また、今回の写真展は震災ボランティア活動をしている学生、そして大学関係者が互いを知ることができるいい機会となった。今まではそれぞれが独立して活動しており、互いの活動を知らないところもあったが、今回このようなネットワークを作ったことによって問題意識の共有が可能となった。実際に、写真展を機に知り合った学生同士の間で新たなボランティアの企画も生まれてきている。



写真1：中大学生による気仙沼ホタテ・ワカメ養殖復興支援

③ 事業を実施した感想

1 宮城県気仙沼大島への復興支援ボランティアの派遣

3日間の作業でまず感じたことは、ボランティアの人手が足りないということであった。瓦礫の撤去作業では、およそ40人の体制で2日間作業にあっても作業はなかなか進まなかった。ボランティアの人数が減ってきている中、このような人の手によってしかできない作業を進めていくことは困難であると感じた。

また、養殖業復興支援では、学生などの若い世代によるボランティア活動の重要性を感じた。復興のための作業には肉体労働が多く含まれるが、東北地方は特にお年寄りが多い地域であり、若い力なしには早期復興の実現は難しいように思える。また、現地の人に頂いた「たくさんの若い人に来てもらえると、地域が明るくなって、元気が出る」という言葉が印象的であった。今後はこれまでのような肉体労働作業は減っていくが、それでも若い世代によるボランティアの重要性は変わらないのだと感じた。

2 中央大学生による震災ボランティア写真展を実施

授業が終了し、大学内が閑散とする時期に開催したにも関わらず多くの人々が来場した。反響は意外と大きく、「復興に向けて頑張ろう」という前向きなコメントや、「被災者として、多くの学生が被災地に来てくれたことをうれしく思う」などといった感想を頂いた。また、それまであまりボランティア活動に積極的ではなかった学生からも、「自分も何かボランティア活動をしたくなった」という感想が聞けたのがうれしかった。震災から1年が経過しようとしている今、もう一度被災地に思いを馳せ、風化させないようにすることの重要性を認識した。

また、今回の写真展をきっかけにそれまで互いを知らなかった学生、大学関係者がつながることができたことは大きな意味を持つと感じた。それぞれがつながることを通じて、被災地の現状やどのようなニーズが発生しているのかなどの情報や、活動に関する悩みを共有できるし、今後自分達にできることのアイディアも多く生まれる。更に仲間が増えることによって、活動の可能性も広がる。現に今回の写真

展をきっかけに、新たに企画が生まれてきており、今後はこのネットワークをもとに、新たな中央大学におけるボランティアの可能性を模索していきたいと考えている。



写真2, 3: 中大学生による震災ボランティア写真展



報道：毎日新聞2012年1月18日東京都版

かんだちめ第5号

団体名 多摩美術大学 かんだちめ

代表者名 戸村 夏佳

① 事業内容

私達が発行しているフリーペーパー「かんだちめ」の企画のひとつとして、八王子市内にある

繊維関係の工場を見学し、その模様を記事にする。テキスタイルデザイン専攻の学生として、

繊維産業の盛んな街という面から八王子市をアピールする。

② 実施報告

八王子市にあるたくさんの工場の中から、奥田染工場、大原織物、みやしん、吉田繊維、佐藤ニット（敬称力）に取材に行った。また、八王子織物工業組合をたずねて、八王子織物の歴史について調べ、まとめ誌面内で紹介した。（2枚目に取材時の写真を掲載。）

発行した第5号は11月の4～6日に行われた芸術祭を始めとし、関東の美術大学、美術予備校、フリーペーパー専門店等に設置・配布した。

③ 考察

時代をともに中小規模の工場が衰退していく中で、私達学生としてできることをもっと広い視野で考えることが大切だと思った。

また、今回の様に読者に興味を持ってもらうだけではなく、協力してくださった工場や企業の方にも直接メリットになる様な効果を持つ誌面になっていければと考える。

八王子市が繊維の街だということに驚いたという人も多く、たくさんの人に興味を持ってもらえたと

思う。普段見ることのできない工場の中を見学させてもらったことは、いつも手作業で作っている私たちにはすごく刺激になった。



奥田染工場



佐藤ニット

吉田繊維



みやしん



大原織物



タップのまち八王子プロジェクト

こども冬休みタップダンス体験教室

団体名 中央大学 タップダンスサークルFreiheit
代表者名 小林夏実

①事業内容

今回の事業では八王子市内の大学生を構成員とするタップのまち八王子プロジェクト実行委員会が、八王子市南大沢文化会館にて小学生を対象としたライブ付きタップダンス体験会を行いました。今回の事業を通して、リズム感や皆と音を合わせる協調性、舞台を作り上げる喜びをより多くの子どもたちに学んでもらうこと、また市内全域を対象とすることで学校の枠を超えた交流を図ることを目的としました。プロのタップダンサーの方を講師に呼び、大学生とともにタップダンスの伝統的なステップを覚え、2日目のミニライブで保護者・一般の方に向け発表しました。

②実施報告

イベント準備として、インターネット上での告知、八王子市内でのポスター貼り、街頭でのビラ配り、駅での中央大学タップダンスサークルFreiheitによるストリートパフォーマンスを行いました。初日は受付(参加費授受)後、タップのまち八王子プロジェクトの趣旨・目的、また今回のこども冬休みタップダンス体験教室の目的の説明、講師紹介、タップダンスのデモンストレーションを保護者の方を交えて行いました。その後保護者の方々には退出していただき、子ども達と大学生の自己紹介を終えてから、レッスンを行いました。Freiheitのメンバーがレッスンアシスタントをつとめ、こども達と一緒にタップを踏んで交流を図りました。

2日間のレッスンにおいて、リズムで遊びながらタップダンスの基礎的なステップや伝統的な振付の一部を指導しました。2日目の最後約30分間に、保護者・一般の方を観客としたミニライブを行い、大学生とともに2日間の体験教室で練習した振付を披露しました。その他にもFreiheitによるライブパフォーマンスをお楽しみいただきました。

ミニライブ終了後、全員で感想発表を行い、交流を深めることができました。

今回の参加人数は1日目、2日目ともに14人でした。

③事業を実施した感想

今回の企画は子ども達が参加しやすいよう冬休みに開催しました。施設の年末休業等が重なり、予定より1日短い、2日間での開催となりました。2日間の体験教室でもタップを知ってもらい、みんなと音を奏でる楽しさを伝えることはできたのですが、より親睦を深め、みんなで協力しあって舞台を作り上げる喜びを学んでもらうには、短期間の体験会教室よりももう少し長期的な企画の方が効果的であると感じました。

また今後、この企画をより盛り上げていくためには、実行委員会を組織作る大学生から、タップダンスを盛り上げていく必要性を感じました。

そのため、来年度は大学生を対象とした企画も行いたいと考えています。

今回参加してくれた子ども達が、「知らない小学校の子と友達になれて楽しかった」、「スニーカーでも音が鳴ったり、初めてタップダンスができたりし

て、楽しかった」と笑顔で話してくれたことが、とても印象的で嬉しかったです。また、参加してくれた小学生者よりも、街頭ポスターや駅前でのストリートライブを見てこの企画を知り、ライブを見に来てくださった一般観覧客の方が多く、「すごく良い企画なので、ぜひ自分もやっ

てみたいと思った」という嬉しいコメントをいただきました。これを受け実行委員会としましては、今後の活動として、幅広い年代の方にご参加いただけるような体験教室の企画も展開していきたいと考えました。

